PART 2

●最悪の激痛「急性上腸間膜動脈閉塞症」●ツバも飲めない「食道がん」●血管がチーズのように裂けていく「大動脈解離」etc.……

ニッポンの名医13人に聞きました

「私なら絶対避けたい」つらい死に方

前号までの本特集では、「がん」「脳卒中」「心疾患」などによる死がどのようなものかを詳報してきた。その中には苦しみや痛みを伴うものもあれば、比較的「ポックリ」と死ねるものも存在した。一方で、様々な「死に方」の中で、どれが一番辛いかを見極めるのが難しかったのも事実だ。

そこで今回、本誌は名医13人に取材を敢行。患者の傍らで数多くの死を見届けてきた彼らに「もし自分ならこの病気で死ぬことだけは避けたい」というものを挙げてもらった。ニッポンの医学界を代表する頭脳が吐露する「本音」は、きっと自らの死について考える格好の材料となるはずだ。

＊

循環器を専門とする目黒通りハートクリニック院長・安田洋医師が挙げるのは急性上腸間膜動脈閉塞症だ。

「血流が途絶えて栄養が行き渡らなくなった腸が腐って、腹部に激痛が走るようになります。発症後は痛みがどんどん増幅する。患者は、血流の途絶えた腸の痙攣で内臓を絞りちぎられるような痛みに襲われパニックになるほど。やがて腸内のばい菌が全身に回って敗血症を引き起こし、意識がもうろうとするなか亡くなることが多い」

小林憲二さん（享年66）も激痛に悶えながら救急搬送先で帰らぬ人となった。小林さんの妻が証言する。

「夫は高血圧だったにもかかわらず、医師からの生活習慣指導を無視し続けていた。ある朝、突然お腹を押さえて床に突っ伏したかと思うと『ウォ～』と叫びながら転げまわったんです。顔面蒼白であぶら汗を流し痛がったので、救急車を呼んだ。『急性上腸間膜動脈閉塞症』と診断され、即手術。しかしその甲斐なく数日後に帰らぬ人となりました」

看取りが専門の石飛幸三医師もこの病気を挙げた。

「2～3時間で処置しないと大量の下血、嘔吐、脱水症状などでショック状態に陥り、死に至る。あの激痛にもし自分が直面したら……と思うとゾッとします」

「平成維新」提唱者による
全く新しい改憲論
大前研一
君は憲法第8章を読んだか
定価：本体1,500円＋税
絶賛発売中！
小学館

『週刊ポスト』次号（10月7日号）は9月26日（月）発売です

一部地域で発売日が異なります

今回、本誌は内科や外科、看取り専門医など各科の医師13人を取材。名医たちが挙げた避けたい死に方は主に「痛みが激しいもの」、「長く苦しむもの」、「精神的負担が大きいもの」の3つのグループに分けられた。

「痛みが激しいもの」として挙がったのは前述した急性上腸間膜動脈閉塞症だけではない。これまで3000人以上の死に接してきた日の出ヶ丘病院のホスピス医・小野寺時夫医師は**すい臓がん**を挙げる。

「すい臓がん、直腸がんや子宮がんの末期で神経浸潤が強い場合、激痛を伴いモルヒネなどを使っても痛みを十分緩和できない場合がある。中でもすい臓がんの痛みが最も激しく、患者さんが半眠状態になるほど大量の鎮痛剤を投与せねばならず、患者さんにとって不運で気の毒というほかない」

「**大動脈解離**も激しい痛みを伴います」と話すのは池谷医院院長の池谷敏郎医師（循環器）だ。

呻き声も上げられない

「長く苦しむ」死に方として、米山公啓医師（神経内科）は腹水が溜まり、尿も出せず、血を吐いて死に至る**肝硬変**を挙げた。

「末期になると食道静脈瘤が破裂して1リットルぐらい血を吐き、放置すれば失血死する。黄疸で体が黄ばみ、衰弱して痩せ衰えた体は全身至るところをチューブにつながれる。肝臓機能がやられ、最後は多臓器不全でやせ衰え、死に至ります」

秋津医院の秋津壽男院長（内科）は**食道がん**が嫌だという。

「食道がんは唾すら飲み込めなくなる。そのままでは生活できないため手術が必要ですが、術後は縫合部分が炎症を起こさないように機械で唾を吸引しないといけない。これがかなり不快なのです。唾を飲み込めるようになっても傷口に障って、また別の不快感が伴う。生き地獄ですよ」

最終的には呼吸器系の合併症を伴い、呼吸ができずに亡くなることが多い。

近年の緩和ケアはひと昔前に比べ格段に進歩しているが、呼吸器系の病気の苦しさはどんな薬剤を使っても取り除けない。「苦しさなら**肺気腫**などの総称である**慢性閉塞性肺疾患**でしょうね」と話すのは国際医療福祉大大学院教授の武藤正樹医師（外科）だ。

「気づいた段階では症状がかなり進行していることが多いため、ある日突然、呼吸ができなくなるというケースが多い。肺に水が溜まってしまうため人工呼吸器も使えず、呻くことさえできずに亡くなります」

一色高明・上尾中央総合病院心臓血管センター特任副院長（循環器）も同意見。

「慢性閉塞性肺疾患は治りません。酸素ボンベをがらがら引っ張りながら少し歩いては『ゼエゼエ、ハアハア』と背中を丸める患者さんの姿を見ると相当苦しそうです。息苦しさを長い期間患った挙げ句に亡くなるので、最も辛い死に方のひとつだと考えます」

歯茎からがんが見えて……

最後に「精神的負担を伴う」死に方として、銀座泰江内科クリニック院長の泰江慎太郎医師（内科）が挙げるのが**糖尿病性腎症**だ。

「糖尿病は手足が壊死したり、失明するなど自由を奪われる。さらに糖尿病性腎症まで引き起こせば、1日4時間、週3回の人工透析を年間約500万円かけてやらなければならなくなる。透析は血圧変動が激しく、丸一日立てないほどの疲労感が出る人もいる。透析を受けて翌日ぐったりしてまた透析、そのうち症状が徐々に悪化して死を迎える。遺された家族の経済的負担が大きいのも避けたい要因の一つですね」

患部が目に入るため失意に陥るのが**口腔がん**だ。横浜市立大医学部の岩井俊憲医師（口腔外科）の話。

「口の中のがんは手鏡で自分でもよく見える。歯茎にできた塊、舌にできた潰瘍（組織が欠けること）などです」

顎にがんができると骨を切除せねばならず、その結果、顔が変形することもあり痛々しさが残るケースが少なくない。

「進行した口腔がんの術後は嚥下（食べ物を飲み込むこと）、構音（声を出す）、咀嚼などの障害が出るので生活の質は著しく低下します。飲食や会話ができない、人間としての楽しみをここまで奪われる病気はないと思います。がんが肺に転移し、呼吸の自由まで奪われて亡くなることが多い」（同前）

脳神経外科が専門の眞鍋雄太・横浜新都市脳神経外科病院内科認知症診断センター部長は重度の**アルツハイマー型認知症**患者が直面する深刻な現実を解説する。

「ある老人ホームで私が主治医を務めた元大学教授が重度のアルツハイマー型認知症でした。英字新聞を読むのが習慣の方だったのですが、理解できなくて癇癪を起こすようになった。失禁すると便の付いた下着を部屋の簞笥に隠す。症状が進行してかつての聡明さは消えても、プライドは残っているのでとても辛そうでした。最期は体力が衰えて、身動きもとれぬまま誤嚥性肺炎で亡くなりました」

患者本人にとっても、看護する家族にとっても負担は大きい。

具体的な疾患ではなく、医療行為が引き起こす「最悪な死に方」を挙げる医師もいた。国際全人医療研究所理事長の永田勝太郎医師（心療内科）が挙げた**スパゲティ症候群**だ。

「事故や脳梗塞などで脳機能が損なわれて朦朧とした患者を管だらけにして栄養を送り込めば、生きられても人間らしさは奪われる。自分の意思と関係なく医療を行なわれ、ある日突然管を外され死に至る。最悪だと考えます」

帯津三敬病院名誉院長の帯津良一医師（外科）は、**抗がん剤の副作用**に苦しめられるのが最も不幸だと話す。

「忘れられない患者に50代の高校教師がいました。潑剌として生徒の信頼も厚い方でしたが、抗がん剤の副作用で髪は抜け落ち、皮膚はカサカサ、食欲も落ちて生気を失っていました。見舞いに来た生徒たちも言葉を失くすほど痩せ細った状態を経て多臓器不全で亡くなられました。抗がん剤も外科手術もその処置によってもう一度社会に戻してあげられるなら必要ですが、ただ単に命を長らえるだけならかえって残酷です」

これらの病気に直面する可能性は誰にでもある。今からできることは日々の摂生と「いざ」というときの心構えを持つことだ。

13人の名医の「避けたい死に方」

安田洋（循環器科）	急性上腸間動脈閉塞症
石飛幸三（看取り）	急性上腸間動脈閉塞症
小野寺時夫（看取り）	すい臓がん
池谷敏郎（循環器科）	大動脈解離
米山公啓（神経内科）	肝硬変
秋津壽男（内科）	食道がん
武藤正樹（外科）	慢性閉塞性肺疾患
一色高明（循環器科）	慢性閉塞性肺疾患
泰江慎太郎（内科）	糖尿病性腎症
岩井俊憲（口腔外科）	口腔がん
眞鍋雄太（脳神経外科）	アルツハイマー型認知症
永田勝太郎（心療内科）	スパゲティ症候群
帯津良一（外科）	抗がん剤の副作用

（登場順）

PART 3

「日本人の死因」で急増中！「肺炎で死ぬ」の天国か地獄か

”ずっと溺れているような状態で苦しむ”という「誤嚥性肺炎」の恐怖とは

長らく日本人の3大死因といわれてきたのが「がん」「心臓病」「脳卒中」だが、近年そこに割って入ってきたのが「肺炎」だ。なぜ増え続けているのか。一体どんな死に方になるのか。

＊

「38～39度の高熱で意識が遠のき、呼吸が重たくなる。”いくら息を吸っても苦しい”という状態が数週間から1か月ほど続くことがあります」（有料老人ホーム「グレイスフル加美西」の武智聖子施設長）

肺炎で亡くなる高齢者の苦しみ方の一例だという。

厚生労働省が9月8日に公表した2015年の人口動態統計（確定数）によれば、肺炎は日本人の死因の第3位に入っている。年間約12万人が亡くなり、死亡総数の9・4％にあたる。

マネーポスト 2016年秋号
今が旬の「割安&お宝銘柄」を狙い撃ち！ 10万円で買える爆騰株
好評発売中！ 定価620円（税込） 小学館